

「ドイツ派遣プログラム参加報告書」

京都大学 経済学研究科1年 黒岩 久登

このドイツ派遣プログラムの目的は現地の学生とのワークショップや企業訪問を通じて、相互的に、異文化また個人個人の研究知識を交換しあうというものでした。特に私はその中でも、環境経済学を専攻していることから、ドイツにおける環境政策や技術、人々の環境への意識、また企業の取り組みなどに興味を持っており、実際にドイツでそれらのテーマで理解を深め、日本と比較していくことが一番の目的でした。

派遣メンバーは学部生から博士課程の学生（留学生在がマジョリティ）と様々で、個々の研究内容はそれぞれ異なっており、派遣前の準備段階で色んな知見を共有することができました。

国内での学習とドイツでの学習は驚くほど異なっていたのが印象的です。例えば、ドイツの生徒はクラスの規模に関わらず自分の意見をはっきり主張しますし、レクチャーを行う教授との関わり合いが非常に相互的でした。そのためドイツの学生は授業に関してとても積極的だと感じました。

そのような事実を目の当たりにし、レクチャーやワークショップなどを通じてゲーテ大学やハイデルベルク大学の学生と意見を交換する場では、相手の意見に押されるのではないかと少し不安でもありましたが、実際はそんなことはなく学生一人一人気さくに会話することができました。「自分の意見も大切だが、それ以上に相手の意見も尊重する。」これは国際理解を深める上で非常に重要なことだと私は思いますし、今回これが国際的に共通して言えることだと感じました。そうすることでまた更なる話題も生まれることでしょう。このような現場を通じて、私も自分の意見を持って発信する際には相手の意見も慎重に考察する必要があるとわかりました。相手の意見を汲み取ってうまく発信していきたいです。

今回の派遣でショックを受けたことは多々あります。ショックといってもネガティブなものではなく、新たに知ることができた事実ということです。まず、フランクフルト駅周辺における中東系移民の存在です。ドイツにおける移民政策は以前にも耳にしていましたが、ドイツ国内で移民のコミュニティができていているという事実には驚きました。そのエリアではドイツ人を見ることは少なかったですし、売られているものも他エリアと比べて非常に安かったです。また、ドイツ人は優しく温かいというイメージが強かったのですが、通りの人々を考察していると必ずしもそうではないように思えました。通り際の人と人との緊張がなんとも新鮮でした。しかしその反面、心温かい場面も多々ありました。朝ごはんを駅で食べている時にドイツ語でいきなり楽しそうに会話をしてくる中年男性（何を語られていたかは不明です）や、道に迷っている時や緊急事態にすぐ気付き、声を掛けて教えてくれたり、電話を貸してくれたりする方などがいて心も暖かくなりました。日本にない他の経験といえば、環境に対する意識です、公共の場でのゴミ箱はリサイクル用に5種類ほどに分けられていて、またペットボトル、瓶の飲料水を購入する際にはペットボトルの利用料として20セントが料金に上乘せされます。また、風力発電機は郊外では至る所で見られ、太陽光パネルも非常に多く見受けられました。環境問題への取り組み、姿勢、また現段階での進行具合はドイツではより進んでいるようでした。

プログラムはゲーテ大学、ハイデルベルク大学の学生とのワークショップ、レクチャーをはじめとして、参加者の研究内容や、興味に合わせて自由に訪問企業を選び、自分たちで計画していくというものでした。私たちのプログラムでは、IG Metal、Stock Exchange Market、Ministry of Economics、Energy、Transport and Regional Development of State of Hessen、そしてSMA solar technology AGを訪問しました。各企業におい

て参加者内で代表を決め、リードするという形でインタビューを進行しました。ゲーテ大学では修士課程プログラムのレクチャーを受け、またその後は現地の学生と意見を交換しあうことができました。また、ハイデルベルグ大学とのワークショップではプレゼンテーションを通じて研究内容やドイツでの学生生活から、世界中の問題まで広く議論することができました。

このプログラムを通じて、現地学生のレベルの高さ、ドイツの個人または企業の環境問題に対する意識の高さを知ることができました。と同時に自分の不甲斐なさも感じざるを得ない時もありました。今回の経験を通じて、またこのような研修において成果を十分出せるように研究、学習をしっかりとやりたいと感じました。ドイツで学んだ姿勢を日本に広められるように、研究生活で知見を広めて日本でも発信していきたいと思いました。また、SMA Solar Technology ではその技術力の高さと、職員の環境に対する強い思い、マーケット戦略についてレクチャーを受けた時に、私の研究を深めるためには技術的な理解が必要不可欠であるとわかったので、今後は積極的に工学の知識も身につけていきたいと感じました。

非常に有意義なプログラムであり、得るものは各個人ともに期待以上だったと思います。このプログラムが今後また続けられ、来年の参加者もこの貴重な経験を体験してほしいと思います。

最後にこの機会を与えて下さった先生方、スタッフの皆さま、そして一緒に参加して最高の派遣プログラムにしてくれた参加者の皆さんに、心より感謝申し上げます。